

“ノコギリヤネのある風景”の発見
(断章 “ノコギリヤネのある風景 ” その1)



▲閉ざされたノコギリヤネの扉

昨年の台風によって、名鉄尾西線・玉ノ井駅に隣接して佇む建物の壁面の一部が破損した。それを見て、その建物が、この地域特有の「のこぎり屋根」の工場建築であったことにあらためて気づいた人たちもいるのではないかと。埋没した日常の中に、“ノコギリヤネのある風景”を発見した人たちが。（「タマノイノコ」に見る風景の予感」2019.10.31）。ワタシは、この地域の「のこぎり屋根」の工場建築（及び旧工場を含むすべて）を「親しみ+ポテンシャル」を込めて“ノコギリヤネ”と呼んでいる。

昨年、「のこぎり二」が「なかなか遺産」なるものの認証を受けたことに、いわゆる産業遺産とは異なる可能性を感じた。また、二ヶ月ほど前、木曽川に架かる尾濃大橋のたもとに立地した「スパーク」に、新世代によるノコギリヤネの未来を確信した。かつてノコギリヤネは、この地域の経済基盤を担ってきた。そして、地域社会の再編が不可欠であるいま、大きな可能性を感じる。

ノコギリヤネの新たな利活用という部分にとらわれず、「風景」という俯瞰的な視点から、この地域のノコギリヤネをめぐる状況を探っていこうと思う。今回は、ワタシ的な立場から、過去のトピックを抽出しながら“ノコギリヤネのある風景”の発見について記したい。

ノコギリアン（神奈川県藤沢市在住／一宮市今伊勢町出身／時々、のこぎり二に出没）

1. 2006年6月17日：ワタシの“ノコギリヤネのある風景”の発見

それは、13年ほど前に遡る。都市計画・まちづくりのコンサルティング業務に携わってほぼ四半世紀が過ぎていた。その間、国や地方の重要プロジェクト等に携わる機会も幾つか経験した。しかしながら、誤解を恐れずに言えば、計画づくりの多くは結果ありきのもので、その理屈を構築する作業に過ぎなかった。上滑りの言葉が並ぶ「計画のための計画づくり」。しかし、ワタシもそれに加担してきた訳だ。それでも、可能な限り、都市計画プランナー／都市計画家としての良心を注ぎ込む努力はする。しかし、流れはもう決まっているのだ。正直に言えば、仕事としての都市計画・まちづくりに限界を感じ、嫌気がさしていた。

そんな時であった。ある土曜日の朝、全国紙の文化欄に、見覚えのある建造物の写真を発見した。いわゆる「のこぎり屋根」の工場である。ああ、ワタシのふるさとだ。写真から、機を折る音が聞こえてくる。ガッチャン、ガッチャン。ワタシは、いま、小学生になって写真の中にいる。初めて「のこぎり屋根」を風景として意識したような気がした。風景とは、「景」とはひかりの意として、①目の前にひろがる眺め。景色。②その場のようす。情景。」(大辞林第三版)とある。それは単に見えるものではなく、心にあるものが投影されて、心にある感じを起こすものだろう。それは、懐かしさだけではなかった。ワタシは、写真の「のこぎり屋根」に何かしらの可能性、期待を感じていたのだろう。ワタシは、新聞記事の見出しのごとく、「恋に落ちてしまった」のかもしれない、ノコギリヤネに。

そして翌日、ワタシはこの場所に立っていた・・・となるはずだったが、現実はそのようなドラマチックじゃない。浮世の事情から、この場を訪れるまでに2ヶ月を要した。さらに、初めて「のこぎり屋根」を風景として意識した時の感動は薄れていた。そこで見たのは、くたびれた「のこぎり屋根」工場であった。しかし、ワタシのノコギリヤネドラマはここから始まった。



▲「愛の旅人 三岸節子と好太郎」(朝日新聞週末別冊版 be)

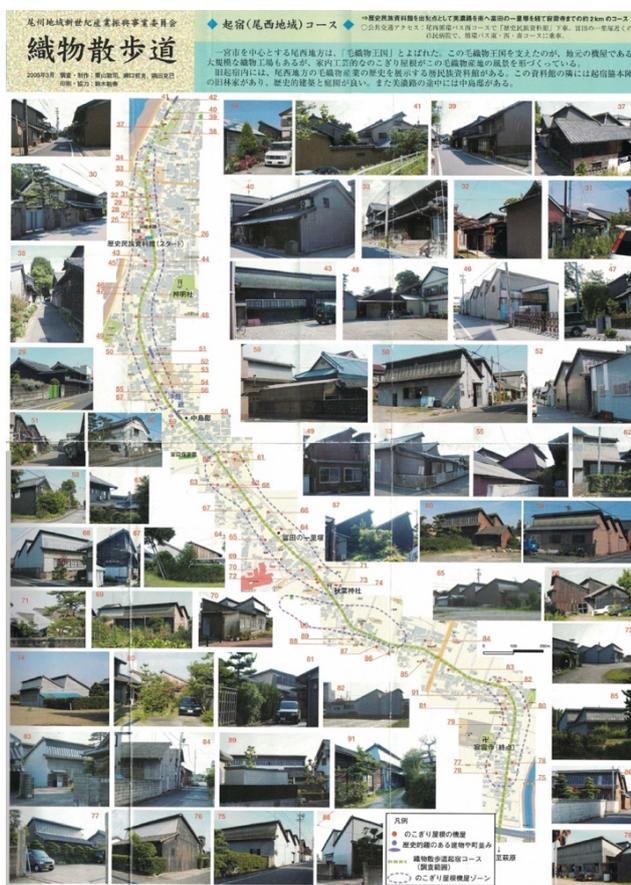
2. 2012年2月4日：「産業遺産」としての“ノコギリヤネのある風景”

“ノコギリヤネのある風景”の発見の翌年、偶然にも、一宮市の中心市街地活性化計画の見直しに関わることになり、地元でまちづくりに関わる方々とも知遇を得て、故郷に通うようになった。ノコギリヤネについて、少しずつ分かってきた。

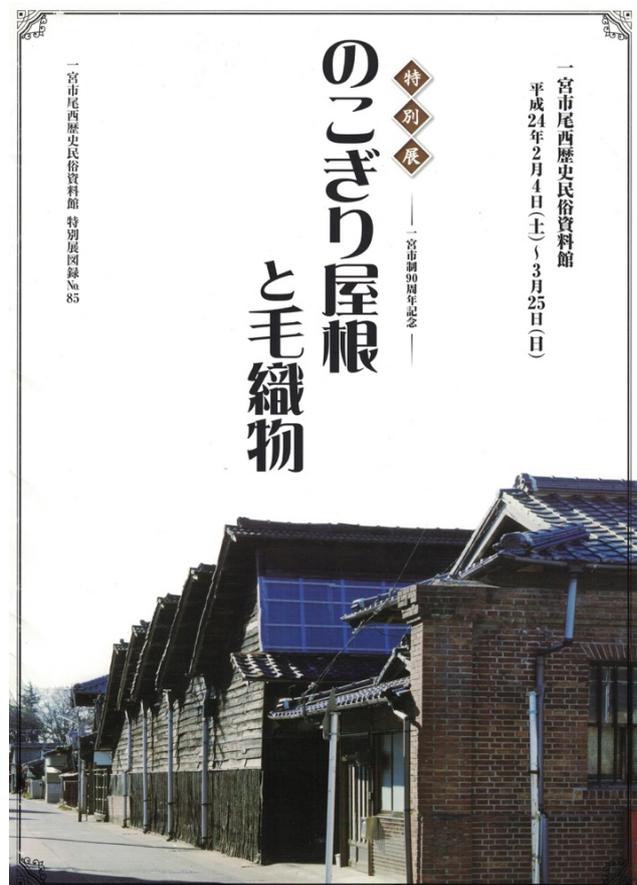
ワタシの手に、「尾散散步道」と題する三枚の案内図がある（2005、2006、2008年）。美濃路、奥町界限に立地する「のこぎり屋根工場」を丁寧に拾い、その写真と分布図が掲載されている。おそらくこれが、「のこぎり屋根」が注目された嚆矢ではないかと思われる。作成主体が「尾州地域新世紀産業振興事業委員会」となっており、繊維産業の振興がベースにあったことがうかがえる。

また、建築の調査研究対象として、大学研究室や建築関係者等による実態把握が進んだ。その大きな成果が、地元建築士の方々による調査によって、2010年末現在、工場として稼働していないものを含めて、一宮市内におよそ2,250棟の「のこぎり屋根工場」が確認された。南半分のエリアが未調査であり、また、その後、取り壊されたものもあるが、いまだ2,500あるいは3,000棟近い「のこぎり屋根工場」が残存するものと推測される所以となっている。

さらに、全国的な展開として、近代工業化を担った工場等を歴史的な価値を持った「産業遺産」として、地域活性化や観光等の資源として見直す動きがあり、行政、市民から注目される機会が増えてきた。こういった動きを総括するかたちで、2012年には、起にある一宮市尾西歴史民俗資料館において「のこぎり屋根と毛織物」と題する特別展が開催されている。少なからぬ市民が、この特別展を通して、身近な存在のノコギリヤネをこの地域の資源として注目するきっかけとなったのではないだろうか。市民レベルで、「産業遺産」としての“ノコギリヤネのある風景”が発見された。



▲「織物散歩道」
(2005、尾州地域新世紀産業振興事業委員会)



▲「のこぎり屋根と毛織物」
(2012、一宮市尾西歴史民俗資料館特別展)

3. 2016年11月3日：“ノコギリヤネのある風景”のメタモルフォーゼ

全国紙の文化欄に、原風景としての“ノコギリヤネのある風景”を発見してから、十年が経過していた。「恋に落ちた」に反して、ワタシは、熱心なノコギリヤネ・ウォッチャーではなかった。先の特別展も終了間際に知り、見逃してしまった。そもそも、産業遺産というとらえ方に疑問を感じていた。ワタシには、ノコギリヤネは、この地域の産業・経済を担う現役に映った。2,500棟という数の真偽、また、そのうちどれだけが稼働しているのかもわからない。しかし、全体の8割を占める一・二連の家族経営の小さな「のこぎり屋根工場」こそが、この地域の毛織物産業の底力を担っているのではないか。一方で、高齢化の進行、家族形態の変化等で減衰過程にある。ワタシの関心は、この“ノコギリヤネのある風景”の背後にある地域社会そのものにあった。だから、先達の力（伊藤喜栄元慶応大学教授）を借りて、起、一宮市を超えた尾張／尾州の広がりの中で、海あるいは河川氾濫原であった古代まで俯瞰した「地歴史講座」を立ち上げ、自分なりにこの地域の成り立ちから学ぶことを始めた。

そして、「のこぎり二」に遭遇した。それは、産業遺産として展開されつつあった“ノコギリヤネのある風景”を大きく変えるものであった。ノコギリヤネの根源にある「家族」を問うものであった。工場からギャラリー・工房等への単なるリノベーションではない。生物学で、変態／メタモルフォーゼとは、「動物の正常な生育過程において形態を変えること」(wikipedia)を表す。これになぞらえれば、「のこぎり屋根工場」から「のこぎり二」という“生育形態”へのメタモルフォーゼである。そして、「のこ座」というそこに集う人たちによる開かれた共同作業の場によって成長した。敷地内に建てられ、家族に閉じられた「のこぎり屋根工場」が、地域に開き、自らも成長していく“ノコギリヤネのある風景”へのメタモルフォーゼの姿を提示したのである。ワタシは、閉じた「のこぎり屋根工場」が開かれ、主体性を持って動き出すさまに、「ノコが起つ」という言葉を付してエールを贈りたい。ノコギリヤネのメタモルフォーゼに。

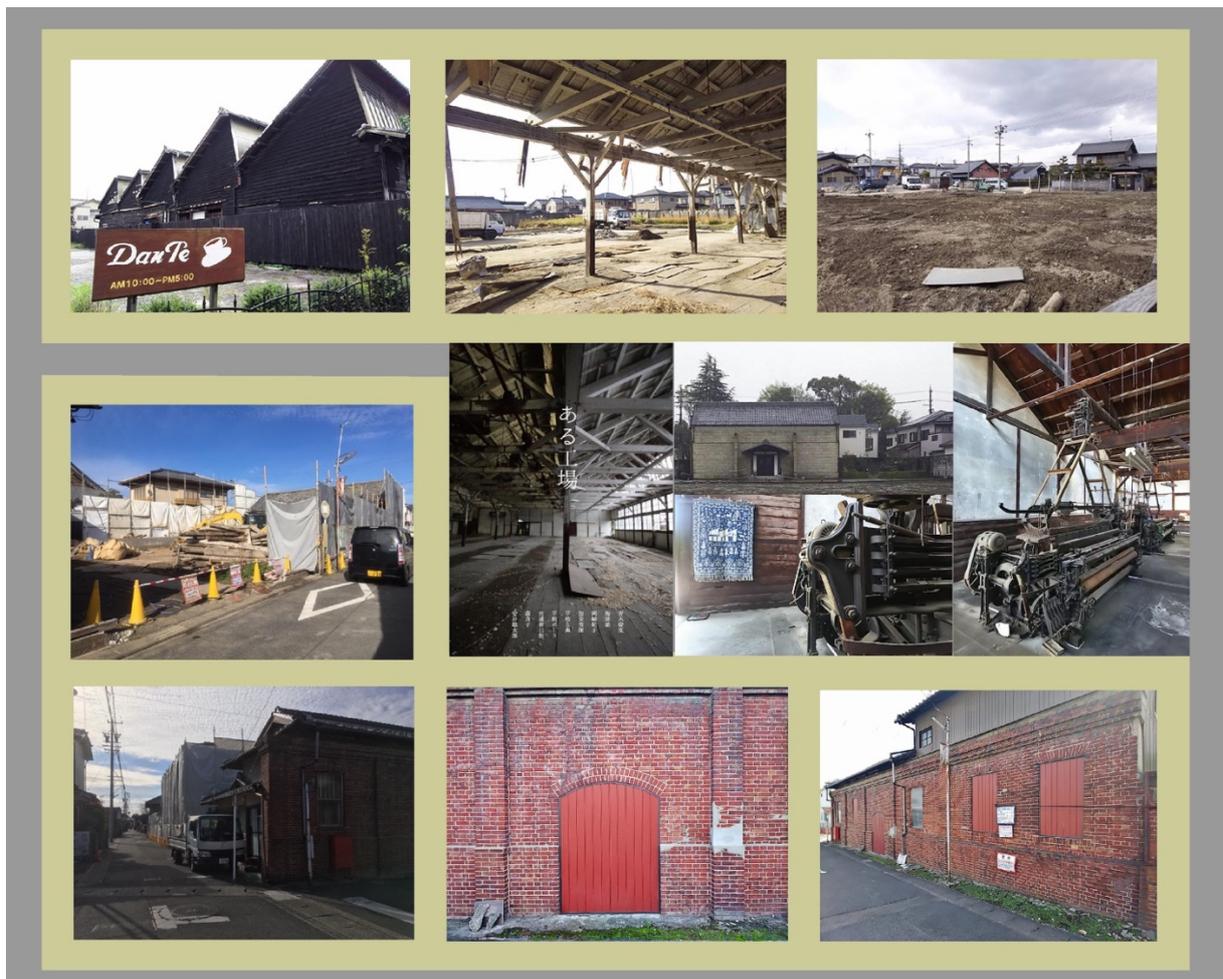


▲「のこ座」案内（第1回～第14回）

4. 2018年12月15日：なかなか遺産認証式／消えてゆく“ノコギリヤネのある風景”

“ノコギリヤネのある風景”とは、同時に“ノコギリヤネの消えつつある風景”である。「なかなか遺産」認証式当日、ワタシは、起の升善毛織さんのノコギリヤネが解体されたことを知った。先の台風による被害で、取り壊しに至ったという。ワタシは、翌朝、現場を訪れた。幾度となく訪れたところである。工場の解体された敷地内はまだ整理中であつた。取り壊しに至るまでには紆余曲折があつたと聞く。北側の道路沿いに立つ赤レンガの壁はそのまま残っている。そこに嵌め込まれた扉と窓は閉ざされ、伝えきれない数々の出来事ともう戻れない過去を暗示しているかのようである。いま「のこぎり二」には、升善さんで使われていた二台の織機が保管（常設展示？）されている。所有は玉ノ井の葛利毛織さんと聞く。これも何やらいわくがありそうだが、升善毛織の“ノコギリヤネのある風景”が消えた一方で、起・籠屋・玉ノ井が連携する“ノコギリ・トライアングル”とも呼べそうな新たな“ノコギリヤネのある風景”の登場が興味深く思われる。

名鉄尾西線の奥町駅から北に10分程歩いた住宅地の中に、大谷石の瀟洒な外壁のカフェが佇む。もともと倉庫であつたものが改装され、ダンテという名のカフェ&ギャラリーに再生された。向かいの住宅地一帯は、市橋毛織さんののこぎり屋根工場のあつた跡地を開発したものである。2017年の3月、このダンテで、「ある工場」と題して、「のこぎり二」に集う有志によって、解体された工場の写真や図面等の展示会が開催された。それは、消えてゆく“ノコギリヤネのある風景”を記憶として残す試みであつた。そして、開催中のある日、女性オーナー自らが入れる珈琲をカウンター席でいただきながら、お話をうかがうという幸運に恵まれた。ワタシは、ダンテというノコギリヤネ文化に結実した、在りし日の“ノコギリヤネのある風景”に思いを馳せていた。



▲「市橋毛織」と「升善毛織」の残したもの

○エピローグ

ワタシが発見した“ノコギリヤネのある風景”は消えてしまった。これから、多くの“ノコギリヤネのある風景”がなくなってゆくことだろう。そして、衝撃的な情報がある。“ノコギリヤネのある風景”として、ノコギリヤネによる新たな生活のカタチを“カッコよく”示してくれた「スパーブ」が、河川計画の一環として、立ち退きが課せられているというのだ。十年以内に消えてしまうことがわかった。

“ノコギリヤネのある風景”は、未来永劫に残るものではない。また、そうすべきものではないかもしれない。ワタシは、ノコギリヤネを、その構造、造作等から仮設的なものとして捉えている。これは、ノコギリヤネの価値を貶めるものではない。むしろ、メタモルフォーゼという変身、さらなる成長が期待できるということだ。そして、仮設的であることは、移築という展開も視野に入ってくる。仄聞するに、可能性は高いという。

“ノコギリヤネのある風景”は、極めてコンテンポラリーかつ創造的なテーマを提供してくれる。暫くの間、“ノコギリヤネのある風景”と付き合ってみようと思う。“恋”ならぬ“ノコギリヤネ”に堕ちた身としては。

2019. 12. 30



▲「スパーブ」という“ノコギリヤネのある風景”